

近世における中国ムスリムの初等教育

—『天方三字経』初探—

佐藤 実

Elementary education of Chinese Muslim in Modern China: On *Three-character Classic of Arabia*

SATO Minoru

In this report, I examine how the *Three-character Classic of Arabia* was read, by confirming the printed book of it and understanding the characteristics of its contents in the round.

There are two kinds of *Three-character Classic of Arabia*, one with the notes of Yuan Guozuo and the other with the notes by Ma Dexin. That is, it was found that the printed book only with passages from the sutras, which is thought to be written by Liu Zhi, does not exist. The contents of *Three-character Classic of Arabia* are organized mainly based on Islamic theory and practice. When taking Islamic theory and practice as the ordinary knowledge for Muslim people, the format of *Three-character Classic of Arabia* is similar to that of the Chinese traditional *Three-character classic*. It is possible to say that the *Three-character Classic* is the elementary educational textbook based on the framework of the *Three-character classic*. And, it was pointed out that the fact that Chinese Muslim people valued not only Arabic and Persian but also education of words of Chinese or education in words of Chinese from the existence of the *Three-character Classic of Arabia*.

キーワード：『天方三字経』、『三字経』、経堂教育

はじめに

本稿ではイスラームの教えを3字1句で説き著した『天方三字経』の書誌的考察をおこない、テキストを校訂したうえで、近世中国におけるムスリムの初等教育の一端を理解するてがかりを提起したい。

中国には伝統的な児童教育書（訓蒙書）として「三、百、千」とよばれるものがある。それぞれ『三字経』『百家姓』『千字文』の頭文字をとっての称謂である。

宋代に作られたとされる『百家姓』は、500字弱の姓の羅列であり、もっぱら識字に力点がおかれて

いて、読書、勉強するのに楽しいものではない。『千字文』は梁の武帝が周興嗣（470-521）に作らせたもので、1000字を重複せずに使用して天文、地理、歴史、修身など幅広く言及している。ただしもともとは武帝が王子に書法を学ばせるための模本であったので、識字教育という点では文字の選定にかたよりのがある。

それにたいし南宋の王応麟が著したとされる『三字経』は3字1句によって倫理道德、身の回りの物、歴史、故事などが説かれるのだが、村上嘉英氏が指摘するように初期のもので1000字強、重複した文字を除けば500字強で、画数の多い漢字は少なく、なおかつ常用される虚詞が何度も登場するので漢字を学ばんとする者には有用である¹⁾。また本文中には「養いて教えざるは、父の過たり、教えて厳ならざるは、師の惰たり。子にして学ばざるは、宜とする所に非ず、幼にして学ばざれば、老いて何をか為さん」とあるように『百家姓』『千字文』にくらべて教育を明確に意図した書であるといえる。3字を1句とする形式は漢文としてはそれほど一般的ではないが、版本はいくつも存在するし、その短さゆえの著作しやすさからかいろいろな『三字経』が書かれることになる。たとえば清代には、女性向けの『女三字経』、歴史、地理に特化した『歴史三字経』『地理三字経』、医学関係では『医学三字経』のみならず『外科三字経』『眼科三字経』など各科ごとにある。民国期にはいると『軍人識字三字経』『抗日三字経』『抗戦建国三字経』などキナ臭いものも登場する。宗教関係では本稿でとりあげる『天方三字経』のほかに、キリスト教宣教師が布教のためにいくつか出版していて、有名なものには宣教師メドハースト（W.H.Medhurst 中国名、麦都思）の『麦氏三字経』（1843）などがある²⁾。

さらには朝鮮、ベトナム、日本にも『三字経』そのものが伝わったのみならず、3字1句として書き連ねるといって『三字経』の形式が伝わり、内容的には当地特有の『三字経』が著されている³⁾。『三字経』の中国内外への伝播というのは、3字1句という形式をかりて人々の蒙を啓こうとする営みの伝播ということになる。

一 『天方三字経』について

1 2種類の『天方三字経』

さてイスラーム版『三字経』こと『天方三字経』であるが、本書は清初に活躍したムスリム知識人、劉智（1670頃-1740頃）が著したとされている。

1781（乾隆46）年、広西巡撫であった朱椿がイスラーム関係の書物を所持していたかどで海富潤というムスリムを検挙した。その上諭によれば、海富潤が携帯していた漢籍には『天方至聖実録』『天方字母解義』『清真积疑』そして『天方三字経』があり、これらの書は袁国祚が乾隆40年から43年に刊刻したものであるという。したがって『天方三字経』は乾隆年間にはたしかに刊刻されていたことがわかる。

1) 村上嘉英「三字経について」（『天理大学学報』23巻5号、1972年）を参照。

2) 寧波市鄞州区政協文史資料委員会編『蒙学之冠—《三字経》及其作者王応麟』（寧波出版社、2007年）、片野英一「東アジアにおける『三字経』の普及に関する一考察—その変遷を地域別に辿って—」（『日本の教育史学』45集、2002年）を参照。

3) 注（2）片野論文を参照。

だがいま目撃しうる最も古い『天方三字経』は袁国祚の注が付された『天方三字経註解』である。袁国祚の序は1809（嘉慶14）年だが、封面の刊記によれば1870（同治9）年に鎮江で刊刻されている⁴⁾。便宜上、袁国祚本と呼んでおく。

袁国祚の序からちょうど50年おくらせて1859（咸豊8）年にも『天方三字経』が刊刻されている。封面には「天方学人復初氏続刊」と書かれ、馬徳新（1794-1874、字は復初）が著したとおもわれる「続天方三字経」がまず巻頭にある。そのあとに「天方三字幼義」というタイトルで『天方三字経』の本文がつづく⁵⁾。こちらは馬徳新本と略称しよう。「続天方三字経」と「天方三字幼義」は別の文章である。馬徳新本の冒頭には「金陵劉智介廉著 滇南後学馬聯元致本較正資刻」とあり、馬徳新の弟子である馬聯元（1841-1903）の校訂をへて、馬聯元によって刊刻されたことがわかる。この馬徳新本を成都の王占超が重刊しているが⁶⁾、巻頭の「続天方三字経」しかなく、「天方三字幼義」（いわゆる『天方三字経』の本文）はない。おそらく何らかの事情で脱落したのだろう。なぜなら封面には「天方学人馬復初註解」とあり、注（5）のテキスト本文のところどころ付されたアラビア語・ペルシア語・漢語による語釈や注釈が馬徳新によるものであることがわかる。また東洋文庫には刊刻年がわからない別の馬徳新本が所蔵されている。以上の2種がいまのところ見られる『天方三字経』である⁷⁾。文字の異同はさほどないのでどちらをテキストにしても大きな問題はなさそうである。

ただ、袁国祚本には袁国祚の注が付されているし、馬徳新本には馬徳新による注釈があり、さらに馬聯元の校訂をへている。つまり劉智著『天方三字経』の単経本とも呼ぶべき書はいまのところ伝わっていないことになる。馬徳新本が袁国祚本から袁国祚の注を取り除いて本文だけを抽出したものなのか、それとも袁国祚の注が付される前の単経本『天方三字経』が行われていて、それを馬徳新本は踏襲したのかはよくわからない。疑いだすときりがないのだが、袁国祚が劉智の『天方三字経』を刊刻したことになっているけれども、劉智が『天方三字経』を著したとする直接の証拠はない。袁国祚の1809（嘉慶14）年の序に「一齋夫子按天方経史、著書数十種、歴歴伝世、家喻戸曉。惟天方三字経乃啓蒙乃書、而句読類乎浅近皆真経聖典理道精華」とあるのが唯一の証言である。したがって『天方三字経』が劉智の著作であるというのは、厳密に言えば、袁国祚の言にしたがえば、というかっこ付きにならざるをえない。

しかしそれは『三字経』じたいが南宋の一流の学者であった王応麟の作品であるとされてはいるが、かなりあやしいという状況と似ている。民衆レベルで実際に使用されていた識字教科書のたぐいは、誰が著したというものではなく、教育の実践において間断なく改編され、のちに著名な学者の名を冠して出版されるということがあつたのではないだろうか。

4) 東洋文庫所蔵。『清真大典』に所収のものも封面はないが同じ版本である。

5) 東洋文庫所蔵。また『清真大典』にも収められている。

6) 発行年の記載はなし。東洋文庫所蔵。

7) 類似のものとしては、馬安礼訳『天方四字経』1897（光緒23）年、納国昌『天方三字経続編』1995年などがある。

2 『天方三字経』と伝王応麟『三字経』、『麦氏（メドハースト）三字経』

『天方三字経』は全部で1332文字。伝王応麟『三字経』よりやや多い。冒頭の28句84字はつぎのようになっている。

天地初、万物始、有至尊、曰真主。
 統乾元、運理氣、分陰陽、化天地。
 奠山川、茁草木、定災祥、彰日月。
 騰鳥獸、躍魚鱗、万類備、乃造人。
 畀以智、賦以靈、故人為、万物精。
 降聖人、伝大教、教吾人、明大道。
 大道明、方謂人、大道昏、不如禽。

天地万物が存在するまえに真主（アッラー）がいて、真主が万物を創造する過程が述べられる。そして聖人（ムハンマド）を地上に降して、大いなる教えを伝えさせた。大道（イーマーン、ただしい信仰）がはっきりしていて、はじめて人間といえる。ちなみに伝王応麟『三字経』の冒頭はつぎのようにはじまる。

人之初、性本善、性相近、習相遠。
 苟不教、性乃遷、教之道、貴以專。
 昔孟母、扞鄰処、子不学、断機杼。
 竇燕山、有義方、教五子、名俱揚。
 養不教、父之過、教不嚴、師之惰。
 子不学、非所宜、幼不学、老何為。
 玉不琢、不成器、人不学、不知義。

まず中国思想においてよく議論される性説について、人の本性が善であることを確認する。そして孟子の母や竇燕山（禹錫）の教育熱心ぶりをあげて教育・勉強の重要性が述べられる。冒頭の書きだしを比べただけだが、『天方三字経』が神による万物創造からはじまるのにたいし、伝王応麟『三字経』はまさに児童教育の重要性を説くという違いがはっきりでている。これを宣教師メドハーストの『麦氏三字経』⁸⁾とくらべると、伝王応麟『三字経』と宗教系『三字経』の特徴がよりいっそう明確になる。

化天地、造万有、及造人、真神主。
 無不在、無不知、無不能、無不理。
 至公義、至愛憐、至誠実、至聖然。
 神為靈、綵無像、無可壞、無可量。
 無何始、無何終、尽可敬、尽可恭。
 凜其威、感其仁、万人乎、頌讚神。
 神造人、如其像、性為善、心為良。

8) 吉田寅「『三字経』と入華宣教師の中国語布教書」（『立正史学』73号、1993年）からの引用。メドハーストの『三字経』は316句948字。

最初の4句は『天方三字経』とそっくりである。『天方三字経』をまねたのではないか、といわれても仕方がないほどである。そしてつづけて神の属性が列挙される。神の属性についてはもちろん『天方三字経』にも「主無方、亦無体、無状式、無比擬。主無二、乃獨尊、帝之帝、帝之君。任行止、命死生、亘今古、無変更」とある。してみると『天方三字経』『麦氏三字経』は宗教教育を前面に押し出した形になっているのは当然なのだが、3字1句によって唯一の神の教えを説明しようとするとは表面的には類似してくることがわかる。

3 内容簡介

伝王応麟『三字経』の内容は村上嘉英氏によってつぎのようにまとめられている⁹⁾。

- (一) 人間の本性 2句
- (二) 教育の重要性とあり方 26句
- (三) 孝 16句
- (四) 日常知識 62句
- (五) 基本学習書の概説及び書物の読み方 68句
- (六) 中国略史 92句
- (七) 勉学の督励 66句
- (八) 訓蒙とその目的 24句

伝王応麟『三字経』でもっとも紙幅をさかれているのは(六)の中国略史であるが、数の単位、四季、方角の名や穀物、家畜の名前などといった(四)の日常知識にもふれていて、必要最小限の知識を習得させるべく内容が編成されていることがわかる。『天方三字経』の内容を概括すれば大約つぎのようになる。

- 1. 神による万物の創造 28句
 - 1.1 万物創造 20句
 - 1.2 神が預言者を降す 8句
- 2. 教育の重要性 12句
- 3. 道について 132句
 - 3.1 道の譬喩 92句
 - 3.2 道の五宗 24句
 - 3.3 天道と人道 16句
- 4. 神の属性と人間の存在について 56句
 - 4.1 神の属性 12句

9) 注(1) 前掲論文を参照。

- 4.2 問答 20句
- 4.3 人の存在について 24句
- 5. 五功の意味と学習年齢について 24句
 - 5.1 五功の意味 16句
 - 5.2 学習年齢について 8句
- 6. 礼拝について 148句
 - 6.1 礼拝の重要性、しかた 32句
 - 6.2 沐浴のしかた、注意（四制十則） 32句
 - 6.3 沐浴をこわすもの（十八事） 16句
 - 6.4 日常礼拝の注意点 48句
 - 6.5 主命の二つの意味 20句
- 7. 歴代の聖人と賢者 36句
- 8. 初学者への留意点 8句

細目をけずって大きな分類で見れば、

- | | |
|-------------------|------|
| 1. 神による万物の創造 | 28句 |
| 2. 教育の重要性 | 12句 |
| 3. 道について | 132句 |
| 4. 神の属性と人間の存在について | 56句 |
| 5. 五功の意味と学習年齢について | 24句 |
| 6. 礼拝について | 148句 |
| 7. 歴代の聖人と賢者 | 36句 |
| 8. 初学者への留意点 | 8句 |

となる。際だっているのは「3. 道（イーマーン、ただしい信仰）」と「6. 礼拝」にかんする記述である。道についてはただしい信仰とはどのようなものであるのかについて、いわば理屈をのべるのにたいし、礼拝にかんする記述は具体的な所作についての説明である。イスラームの理論と実践を中心に内容が編成されていることがわかる。伝王応麟『三字経』とくらべると、「(一) 人間の本性」が『三字経』の根本原理であるならば、まさに『天方三字経』の1は『天方三字経』の根源的思想である。(二) (三) については類似した内容が2で述べられている。(四) の日常知識は『天方三字経』にはないが、ある意味で「3. 道」や「6. 礼拝」がムスリムにとっての日常知識ともいえる。(六) は「7. 歴代の成人と賢者」が相当する。(八) は1の末尾に類似した内容がある。したがって(五)と(七)に相当するものがない以外、伝王応麟『三字経』と似た構成になっているといえよう。

二 経堂教育について

それではこの『天方三字経』は教育の現場において具体的にはどのように読まれたのだろうか。そのまえに経堂教育とよばれるムスリムの教育制度について概観しておきたい。経堂教育とはモスクにおけるムスリム子弟教育のこと。陝西咸陽の胡登洲（1522-1597）が開始したとされる。経堂とはモスクの礼拝殿の手前にあるアホン（阿訇、宗教職能者）が経典を読む部屋をいう。経堂教育はおおきく大学と小学にわかれる¹⁰⁾。

大学はだいたい13歳以上の学生がモスクに住みこみ、アホンについてイスラームの知識を系統的に学ぶ。そこではまず十三本経あるいは十四本経とよばれる経典（クルアーン、ハディース、法学書、アラビア語・ペルシア語文法書、修辞学、神秘学、文学など）を中心に学ぶ。たとえば清末の雲南ではカリキュラムが初級4門、高級6門にわかれる。初級4門はつぎのとおり。

1. 初級アラビア語文法
2. 初級アラビア語語形論
3. イスラム教基本法典
4. クルアーン、ハディース選集精読

高級6門は具体的にはつぎのような書を読む¹¹⁾。

1. アラビア語高級文法：Kāfiya（『語法大全』）あるいはMollār（『満倆』）と呼ばれる文法書
2. クルアーン：いわゆるJalālain（Jalāl al-Dīn al-MuḥallīとJalāl al-Dīn Abdul Raḥman al-Sūyūṭīによるクルアーン注釈）
3. アラビア語修辞学：タフターザーニーのBayānī（『簡明修辞学』）
4. 神学：Kalām（アブー・ハフス・ナサフィー（d.1142）の‘Aqā'id（『信仰』）であろう）
5. 法学：Wiqāya（マルギーナーニーが著したハナフィー派の法学書Hidāyaの簡易注釈本）
6. アラビア語・ペルシア語典籍、詩集：ガーズイーのクルアーン注釈（アラビア語）、フサイニーのクルアーン注釈（ペルシア語）、『天方詩経』（アラビア語）、『フィルダウスイー』（フィルダウスイー（d.1025）の『王書』か？ペルシア語）

それにたいし児童教育である小学では、モスク内あるいは家庭内において、アホンやハリーフアと呼ばれる学生あるいは家長が教える。厳格なカリキュラムはなく、初歩的なアラビア語や宗教知識を学ぶ。小学の具体的な内容は、作証言（シャハーダ）「アッラー以外に神はなし、ムハンマドはアッラーの使

10) 以下、経堂教育については李興華等著『中国伊斯蘭教史』（中国社会科学出版社、1998年）第11章・経堂教育的倡興による。年限やそれに対応する教育内容については地域差がかなりあり、ここであげるのはその1例である。

11) 書名の同定については佐口透「中国イスラムの経典」（『東洋学報』第32巻、1950年）を参考にした。

徒なり」をアラビア語と漢語訳対照したものを熟読する。また沐浴、礼拝、斎戒、通過儀礼について記した「雑学」と呼ばれる啓蒙書、クルアーンの節略本「赫廳（khātāmの音訳、封印の意）」などを読む。

三 『天方三字経』はどのように読まれたのか

以上のようにみえてくると経堂教育において漢語で著されたイスラーム漢籍がテキストとしてあまり読まれていないことがわかる。とくに大学とよばれる高等教育においてはアラビア語やペルシア語習得の基礎の上にクルアーンやハディースが原書で読まれるのであって、王岱輿、馬注、劉智といったひとびとの書がテキストとなることは、すくなくとも表だっては、ない¹²⁾。胡登洲の経堂教育の伝授関係をしるした『経学系伝譜』には、漢字は読めるがイスラームの学問に詳しくない者にたいして、漢語訳した『帰真必要』（*Mirṣād al-‘Ibād*の漢訳）をわたして教育したことが述べられている¹³⁾。このことは漢訳書がアラビア語・ペルシア語を知らない者にたいする便法として使われていたことを物語る。

だがアラビア語・ペルシア語をまだ習得していない小学レベルつまり児童教育においては、シャハーダのアラビア語・漢語対照のものを精読したりしている。また雑学にかんしていえば『真功発微』や『択要注解雑学』といった雑学書はアラビア文字と漢字を併記するものが多い。つまり小学レベルでは書き言葉としての漢語の知識が教育において重要な要素となるのである。そして、資料的な裏付けができないけれども、『天方三字経』は読まれるとすれば、この小学レベルにおいて読まれたはずである。

かれらの母語は漢語であることを確認しておこう。生まれ育つ環境がいかにもイスラーム社会であろうとも、まわりのイスラームたちが話すことばは漢語である。イスラームに関する知識も当然、意味的に漢語に翻訳された語やあるいは音声的にも漢語に分節された語を介して得られる。したがってそれらの知識を書き言葉に置きかえた場合、つまり文字によって伝えようとする場合、たとえもともとはアラビア語・ペルシア語であったとしても漢語で言表されたほうが児童にとってわかりやすいはずである。さらに漢族中心の社会において生きるために漢字の知識が必要であるのみならず、出世栄達するためには科挙に合格する必要があるわけで、漢字そして漢文を理解する重要性は大きい。アラビア語・ペルシア語ができたとしても、当時の中国社会における有用性は低い。そうした意味で『天方三字経』は信仰者としての知識と処世のための知識をつたえる教科書として意義があるのである。

またアホンやハリーフアはともかく、イスラーム的高等教育をうけていない圧倒的多数のイスラームが子に宗教教育をほどこす場合、話し言葉としては漢語を使用するはずであるし、いきおい書き言葉も漢語のほうが利便性は高かったであろう。しかも3字1句であるから、教える側も読みやすかつ教えやすい。『天方三字経』は教える側にとっても便利な書であったにちがいない。

さらにいうならば、『天方三字経』が教える側にとって読みやすいということは、イスラームの知識を知らない成人イスラームにとっても有用であったはずである。明末清初以降、イスラーム漢籍が著述さ

12) ということは、イスラーム漢籍はアホンになるべき人々にたいしてではなく、漢字が読める一般イスラーム—それは官僚となった（あるいはなるべく勉強をした）イスラームである—に向けられたものであったことになる。

13) 趙燦『経学系伝譜』（青海人民出版社、1989年）19頁。

れるようになったが、その主たる目的に、ムスリム同胞にたいしてイスラームの教えを正しく理解してもらいたい、という意図があった。ところが王岱輿、馬注、劉智たちが著した書は分量的にはまずまずの紙幅である。だからこそ馬徳新たちはかれらの書を編集して『真詮要録』『指南要言』といった簡略本を刊行したとかがえられる。そういった意味では『天方三字経』はイスラーム思想のエッセンスをうまく抽出した書であるともいえる。教える側も子にイスラームの知識を教えると同時に学んでいた、あるいは直接じしんのために読んで勉強していた可能性もある。

伝王応麟『三字経』が説く重要なテーマのひとつに孝があげられる。中国ムスリムも孝を重視する。かれらにとっての孝とは、もちろん親にしっかりと仕えるという字義的意味もあり、事実『天方三字経』でも「親と先生に仕えなさい(事親師)」とあるのだが、くわえてイスラームの教えを絶やさずに子々孫々と伝えていくことも孝であると考えられている¹⁴⁾。

だがそのイスラームの教えをどの言語によって伝えるかは立場によってことなる。経堂教育の大学課程つまりハイレベルではアラビア語・ペルシア語によって語られ、伝えられることが求められる。この大学レベルでは漢語はさほど重視されない。けれども児童教育を受ける児童、そしてその児童教育の担い手である一般成人ムスリムにとっては漢語がデフォルトであり、おそらくかれらは漢語によってでしかイスラームの英知にアクセスできない。

もちろん以上のような議論が成りたつためには彼らムスリムの漢語読解能力の習得が前提となる。近世においてイスラーム漢籍が出版されているのは江南、広州、福建といった沿岸地域、内陸では雲南、成都などに限られる¹⁵⁾。需要がなければ供給されない。つまりこれらの地ではある一定程度のムスリムが漢語を読めたということになる。漢語で書かれた『天方三字経』が訓蒙書として成立するには漢語読解というリテラシーが必要なのである。

おわりに

本稿では『天方三字経』の版本をおさえ、内容の特徴を概括的にとらえたうえで、どのように『天方三字経』が読まれたのかについて推察した。『天方三字経』の存在は、漢語による教育、あるいは漢語そのものにたいする教育の重要性を認識していた中国ムスリムの意識のありかたを物語ってくれる。馬徳新は漢語による執筆を得意としなかった。その馬徳新が『天方三字経』に注釈をほどこし、さらには『天方三字経』の続編として「続天方三字経」を著したのは、体制側である清朝におもねったのだという政治的事由からのみ理解すべきではないだろう。

最後に校勘した『天方三字経』のテキストを掲げておく。『天方三字経』の内容についての子細な考察、他書との関係についての検討は稿をあらためておこないたい。

14) 拙稿「中国ムスリムの孝概念」（『東アジア文化交渉研究』創刊号、2008年）を参照。

15) 拙著『劉智の自然学』（汲古書院、2008年）264頁。

校勘本『天方三字経』

凡例

- 一、袁国祚注『天方三字経註解』（1809年袁国祚序、1870年刊）を底本とし、馬徳新続刊『天方三字経』（1859年）を校勘にもちいた。
- 一、原文には段落がないが、意味の区切りがつく箇所では適宜改段し、見出しをつけた。
- 一、文字の異同をページごとに注記した。
- 一、字体については旧字体を使用せず、すべて新字体を使用した。

<p>1. 神による万物の創造</p> <p>1.1 万物創造</p> <p>天地初、万物始、有至尊、曰真主。 統乾元、運理氣、分陰陽、化天地。 奠山川、茁草木、定災祥、彰日月。 騰鳥獸、躍魚鱗、万類備、乃造人。 畀以智、賦以靈、故人為¹⁾、万物精。</p> <p>1.2 神が預言者を降す</p> <p>降聖人、伝大²⁾教、教吾人、明大道。 大道明、方謂人、大道昏、不如禽。</p> <p>2. 教育の重要性</p> <p>爾小子、方有知、学浅近、莫深思。 学孝順、事親師、明長幼、別尊卑。 知仁讓、習礼儀、謹言動、慎非為。</p> <p>3. 道について</p> <p>3.1 道の譬喩</p> <p>稍有進、語汝道、道難言、設喩告。 道之首、念真言、朝謹畏、夕惕虔。 物非主、惟真主、穆罕默、主差使。 道之心、念真經、有聖論、理分明。 凡万物、皆有心、真經心、雅西音。</p>	<p>道之光、語真詳、道之暗、語講張。 真致福、謬招傷、惟魔崇、附誑³⁾唐。 道之狭、不礼拝、自毀宅、如懈怠。 聖人云、拝如柱、立則興、棄則覆。 道之美、潔淨哉、礼潔身、課潔財。 道之法、畏望間、畏主罪、望主憐。 道之礼、知是非、是則近、非則遠。 道之尊、時念主、且以暮、毋暫阻。 道之膚、須知恥、夫恥也、道一支。 道之果、持齋戒、齋戒者、蔽火械。 道之種、時習学、惟学人、品高卓。 爾小子、須謹聽、習学問、為主命。 凡為人、俱当効、無男女、無老少。 道之葉、是慎独、道若裸、慎其服。 真經云、慎得遂、後世途、慎作費。 道之髓、識婦旨、婦旨明、万功啓。 道之根、在誠意、意既誠、百為濟。 道之宅、穆民心、穆民心、主之闕。</p> <p>3.2 道の五宗</p> <p>爾在道、道在爾、若人問、爾对此、 我与道、道在我、無恍疑、無適莫。 人問道、有幾宗、爾对曰、有五宗。 随從⁴⁾者、神之道、受庇者、聖之道。</p>
--	---

1) 人為：馬本「為人」

2) 大：馬本「正」

3) 誑：馬本「荒」

4) 随從：馬本「乘附」

准聽者、穆民道、革黜者、奸邪道。
可待者、異端道、我所履、至聖道。

富捐財、施仁義、朝天房、驗誠志。
統聖凡、括愚智、此五者、毋庸易。

3.3 天道と人道

道之綱、信以心、道之目、行于身。
修天道、勤五功、尽人道、敦五倫。
道如光、在人心、以認主、無象形。
述道已、休思止、須講明、認主理。

5.2 学習年齢について

始七歳、即令知、教習儀、在親師。
十五歳、事在己、自奉行、無推委。

4 神の属性と人間の存在について

4.1 神の属性

主無方、亦無体、無状式、無比擬。
主無二、乃獨尊、帝之帝、帝之君。
任行止、命死生、亘今古、無變更。

4.2 問答

問爾是、穆士林、爾但云、謝主恩。
再問爾、自何時、爾対曰、自約期。
約期云、是何義、面命時、有諄諭。
予主乎、対曰是、化万生、衣祿賜。
有逆者、謬曰否、諸外道、從茲有。

4.3 人の存在について

吁小子、宜知事、教誨言、須謹記。
仰觀天、俯察地、天地中、人為貴。
人之貴、因有靈、參造化、鑑本身。
自原無、今有之、既有之、將又⁵⁾ 歸。
識參此、屬誰為、有主宰、誰敢疑。
思爾身、既有主、應領命、聽安處。

6 礼拝について

6.1 礼拝の重要性、しかた

主有諭、汝切記、遵有賞、悖有罪。
礼拝功、為首命、万行⁶⁾ 根、履真經。
開天鑰、障火屏、滌罪泉、明塚燈。
拜之法、外六儀、用淨水、服淨衣、
立淨處、居正時、心屬意、面向西。
又六件、拜内儀、讚主啓、身直立、
頌真經、躬平脊、下叩首、末跪畢。
凡礼拝、宜整肅、失則沐、脱則浴。

6.2 沐浴のしかた、注意（四制十則）

爾須知、沐四制、一洗臉、自髮際、
至下頷、及耳墜、鬚密者、搯鬚内、
二洗手、至⁷⁾ 肘、三抹頭、四一有、
四洗足、至⁸⁾ 踝骨、宜仔細、毋怠忽。
再須知、沐十則、一洗手、至腕節、
二念名、三刷齒、四漱口、五淨鼻、
抹耳項、洗兩便、鬚搯髻、揚⁹⁾ 指遍、
每一体、洗三遍、次第明、莫教乱。

6.3 沐浴をこわすもの（十八事）

壞沐者、十八事、自後者、糞虫氣、
從前者、溺与瀝、血与淋、精与溢、

5 五功の意味と学習年齢について

5.1 五功の意味

主命汝、以五事、時念主、絶邪思。
日五礼、却塵世、歲月齋、止慾嗜。

5) 又：馬本「有」

6) 行：馬本「善」

7) 至：馬本「全」

8) 至：馬本「全」

9) 揚：馬本「搜」

顕見者、血与膿、傷瘡水、嘔吐盈、
隱微者、狂暈醉、拜中喧、倚物睡。

四賢伝、皆聖道、有浅深、有微妙。
賢之伝、伝于聖、聖之伝、自四侍。
侍与主、中有機、主所隠、人莫知。

6.4 日常礼拝の注意点

沐礼畢、講浴功、浴之由、十二宗。
五主命、四聖功、一典礼、二任従。
樂精出、夫婦共、寢睡時、有遺夢、
月経已、生産浄、此五宗、為主命。
聚之日、会之期、識之日、戒之時、
此四浴、為聖宜。
典礼者、浴亡尸。幼者少、逆者順、
浴或否、従所任。
凡脱浴、有三制、一漱口、二浄鼻、
水遍身、毫無棄。
経産者、同此義。経産時、止七事。
不拝齋、不入御、不謁朝、不入寺、
不捧経、不読制、除此者、余無忌、
既浄已、沐浴之。

8 初学者への留意点

道無尽、理無窮、能体贴、触類通。
爾小子、熟識此、初学人、可已矣。

6.5 主命の二つの意味

凡主命、有二義¹⁰⁾、曰正制、曰副制。
正制者、人人事、一人廢、有關係。
若齋拝、若施濟、若覬朝、若学習。
副制者、責惟備、一人違、衆無事。
如殯礼、如慰嘆、若答安、如問疾。

7 歴代の聖人と賢者

古今聖、十二万、零四千¹¹⁾、道闡半。
至吾聖、穆罕默、道大全、有因革。
吾聖婦、配賢繼、補白克、欧默利、
欧思茫、及爾里、此四配、代伝位。
四配已、四賢居、吾班首、哈納非。
此四賢、人各遵、不相雜、方謂純。

10) 義：馬本「儀」

11) 零四千：馬本「四千零」